



第42号

令和7(2025)年7月25日発行

会員募集中

年会費 3,000円

10月以降入会 1,500円

令和7年度定期総会開催される

4月26日（土）に国際交流センターで令和7年度定期総会が開催され、26名が出席した。総会は、濱手英之事務局次長の司会で始まり、楠敏明会長により議事が進行した。

まず、令和6年度事業報告が楠会長から、決算報告が中山幸子副会長・会計から、そして、監査報告が内田武宏監事からなされ、拍手で承認された。続いて、楠会長から令和7年度事業計画、予算案が説明された。予算案に関して、サロン委員会及び事業委員会の収入及び支出分（見込）が入っておらず、

入れるべきではないかという質疑があり、これらについては特別会計のようになっているため今回の予算案に反映されていないとの説明があった。協議の結果、今後は予算、決算について両委員会の分も反映させるようにするということで、拍手で承認された。



第1回秦氏サミットが開催されました（岡山歴史研究会共催）

岡山歴研の総会に引き続き、同じ会場で「第1回秦氏サミット」が、昨年の高知での「秦・長宗我部氏の会全国連合会」の発会を受けて開催された。秦氏に関係のある高知県等をはじめ地元岡山県などから約70名が参加した。

1 秦・長宗我部氏の会全国連合会総会

広報担当の長谷川周三氏の司会進行のもと、代表

幹事の片岡昌一氏から、予算・決算及び今回の開催内容、今後の方針等について説明があった。続いて、共催の関係団体として長宗我部顕彰会、岡山歴史研究会、秦歴史遺産保存協議会の役員などが紹介された。会長の長宗我部友親氏が体調不良のため欠席、基調講演を予定していた田中英道東北大学名誉教授も欠席さ



片岡昌一氏

歴・研・展・望

喜寿を過ぎた私の一番の関心事は、これからどう生きればいいのかということ。50代、60代は若さの延長で乗り切れたが、70代は老いが年々迫ってくる感じがする。これまで、やり切った、生き切ったという実感がないまま来たので、未だに仕事を続けているが、気力、体力が落ち、継続が困難になってきた。

自分はどこからきて、どこへ行くのかという根源的な問題から文明が進んだとはいえ、明日どうなるのか、わからないことばかり。一寸先は闇とはいうが、事故等に遭遇するとそのことを実感させられる。明日生きるには、ある程度の予想、予定、確信がなければ生きられない。それには過去を参考にするしかない。同じことは二度と起きないが、似たことは起きる。もの事には因果関係があり、予測が可能な

こともある。あるいは人間には理解できないより大きな因果関係、「法（ダルマ）」で世の中は動いているのかもしれない。京都の五山送り火の「妙法」はそれを暗示していて興味深い。私にとって、結果だけ教えてさっぱり理解できなかったのが高校の「物理」の授業である。

百歳まで現役の医師を務められた日野原先生の著書によると、以前から敬意を払ってきた医師を目標にして生きてきたので頑張ることができたという。過去の人の生き方が参考になることは多い。私は、日本で初めてウイスキーを作った竹鶴政孝の伝記を見た時、目標にするのはこの人だと思った。同じ醸酵工学科の卒業生、それも今では遠い日になった。

（会長 楠 敏明）

れ、基調講演は片岡昌一氏が行うことが報告された。

また、当会の本部を高知から代表幹事の片岡昌一氏の住む横浜市に移転したいこと、さらに来年の第2回秦氏サミットは横浜市で開催することなどが諮られ、了承された。なお、長宗我部会長は体調不良が続いているため、今後会長人事について調整し、来年の総会に諮ることとなった。

2 基調講演 「日本の起源と渡来人」

基調講演は、片岡昌一氏が「渡来人伝説・秦氏の群像」（知活舎）を出版されたこともあり、その内容を中心に、私的な見解であるとの前置きのもと、パワーポイントにより解説された。その概要は以下のとおりである。

①日本の祖先人の渡来

2万年ほど前の氷河期の終わり頃、カナン（現イスラエル）の地にエブス人と呼ばれる先住民がいた。その後、ヘブライ人（古代イスラエル人）達が神ヤハウェからもらった約束の地だと言って侵略してきた。土地定着にこだわらなかったエブス人達は、マンモスやアザラシを追ってシベリアの氷原を東に向かった。他の理由として太陽崇拜があり、太陽を追って東へと移動してユーラシア大陸東端の日本にたどり着いた。北海道や東北地方で縄文人（蝦夷）として定着して日高見国を形成し、日本独自の宗教・古神道を開いた。

一方、海から日本列島にやって来たエブス人達もいた。いわゆる海洋族で、漁労を主としていた。この者達はペルシャ湾、インド、東南アジア方面から沖縄、九州方面にたどり着き、熊襲や隼人と呼ばれ、琉球王国を形成した。

②出雲神族の渡来（BC2000年頃）

出雲神族の元祖はクナトノ大神で、イザナギとイザナミの第一子で蛭子（ひるこ）だった。葦で編んだ船に乗せられて蛭子は川に流された。その子がインドのクナ地方を経て日本にたどり着き、出雲に来て出雲国を形成した。しかし、ユダヤ人の「出エジプト」の後のBC13世紀頃、ユダヤ人系スサノオ神が高天原（トルコ西部、タマガハラー）を追放され出雲にやって来た。このスサノオに出雲は乗っ取られ、スサノオは出雲神族の大國主を婿として日本の方々に手を延ばし繁栄した。この出雲族もエブス人ではなかつたかと思われる。蛭子はエビスとも読める。

③ユダヤ人の渡来（第1波）

5000年ほど前、ヘブライ人達はカナンの地で暮

らしていたが、約4000年前のエジプト文明が栄えた頃、天文観測や、石工、土木建設等に長けていたため、捕人としてエジプトに連れていかれ、長年強制労働に就かされた。やがてモーゼに手引されたヘブライ人たちは、エジプトを脱出し、40年かけてカナンの地に戻った。しかし故国はすでに他民族に占拠されており、祖国を捨て他国に転出する者がいた。これがBC13世紀頃の第1波の渡来で、スサノオが渡來したのもこの頃であった。

④ユダヤ人の渡来（第2波）

カナンに戻ったヘブライ人達は、その後多くの戦いの末に祖国を奪還し、北イスラエル王国10部族と南ユダ王国2部族に別れて繁栄した。ところがBC722年アッシリアに攻め込まれ、北イスラエル王国の10部族は国を捨て消えていった。彼らは大舉して日本に渡來した。これが渡來の第2波である。

高天原は時により場所が移動し、この頃は中央アジア弓月国にあった。高天原から先陣としてニギハヤヒが朝鮮半島、出雲を経由し大國主に大和の地を要求した後、大和国（ヤマト国）を建国。ニギハヤヒ渡來の時に大和入りに協力したのは出雲族の裔の長髓彦（ながすねひこ）で、妹をニギハヤヒの妻に差しだしている。ニギハヤヒの渡來の時期はBC660年頃で日本の建国と重なっており、初代の天皇はニギハヤヒではないか。神武天皇は架空で（欽史8代）、神武に相当するのは第10代崇神天皇である。ニギハヤヒが大和に陣取ったのは、東北の日高見国を制圧するためだった。

一方、九州の高千穂にはニギハヤヒの弟であるニニギが天孫として降臨したが、熊襲や隼人の征圧のためだったのではないか。兄のニギハヤヒは陰で弟を支える役目で、表に立つのは弟のニニギであった。しかし、大和国は繁栄し実際の日本の都であるはずの九州高天原は取り残されていた。そこで崇神天皇が、日本を統一しようと大和に攻め上がった（神武東征）が、難波から大和へ入ろうとして長髓彦の激しい抵抗を受けた。天孫側は敗戦寸前だったが、ニギハヤヒは長髓彦を殺して大和入りを助け、自分達は土佐・吉備に遷り、大和は崇神に譲った。これが邪馬台國土佐論であり、邪馬台國吉備論である。

⑤ユダヤ人の渡来（第3波）

秦始皇帝の時代BC220年頃、方士のユダヤ人徐福が童男、童女500人ずつと各方面の技術者等3000人を伴って渡來した。徐福の名目は始皇帝のための不老不死の薬草探しだったが、実際は秦から日本に新天地を求めてのことだった。日本はすでに高天原

系のユダヤ人たちによりほぼ統一されており、徐福の入り込む隙間はなかった。徐福は日本各地をさまざまに日本で亡くなり、新宮市に墓がある。始皇帝自身もユダヤ人だった。咸陽の莊襄王の元に足繁く通っていたユダヤ人商人・呂不韋が王にせがまれ自分の妻を差し出したが、妻はすでに呂不韋の子を妊娠しており、誕生した子が始皇帝である。

⑥ユダヤ人の渡来（第4波）

秦の滅亡後弓月国から朝鮮新羅に逃れ秦韓国を形成していた弓月君（秦氏）は、高句麗の圧迫を受け加羅国に逃れた。応神14年に弓月君が来朝し、「私は自分の国120県の家来を率いて帰化したいのですが、新羅人に邪魔され動けず加羅に留まっています」と申し上げた。応神天皇は葛城襲津彦を遣わし、弓月の人々を加羅から来朝させようとした。3年たっても襲津彦は帰って来ず、応神16年に平群木兔宿禰との戸田宿禰を加羅に派遣し、弓月の人々と襲津彦を加羅国より日本に連れ帰った。

その後、秦氏は平安京造営ほか各方面で日本の発展に尽くした。特に有名なのが、聖徳太子の片腕となった秦河勝である。

⑦ユダヤ人の渡来（第5波）

430年以降、エフェソス公会議で異教とされたユダヤ教（景教ネストリウス派）の者達が蘇我氏と組んで日本でユダヤ教を復活させるべく暗躍したが、大化の改新により蘇我氏が滅亡し、日本での景教復活はならなかった。その後日本では神道と仏教を共存させた神仏合体思想が主流となった。

3 パネルディスカッション

【コーディネイター】

秦・長宗我部氏の会副会長・

総務省委嘱地域情報化アドバイザー

元愛媛大学教授 坂本世津夫氏

【パネラー】

片岡昌一氏（歴史作家、秦・長宗我部氏の会代表幹事）、中津攸子氏（歴史作家、日本ペンクラブ会員）、岡崎洋一郎氏（長宗我部顕彰会会长、元高知市議会議長）、富岡宏之氏（岡山歴史研究会会員、郷土史家）、板野忠司氏（秦歴史遺産保存協議会会长）

【パネルディスカッション概要】

基調講演を受けて、それぞれのパネラーの立場から意見交換された。主な発言は、次のとおり。

・片岡昌一氏：急遽田中先生に代わり行った基調講演はグローバルヒストリーとなつたが、私見に関す

る処も多分にあり、今後皆さんと議論を深めていきたい。特にエブス人の離散の実態、ユダヤ人の渡来と秦氏の関係や日高見国、中国の秦始皇帝や朝鮮半島との関係などについて、古代史の謎の解明が期待される。東大の各県別日本人遺伝子解析調査などの情報にも注目したい。

・中津攸子氏：歴史書に書かれていない真実の歴史が別にある。日本には、記紀より以前に秀真と言われる古代文字がある。世界に誇れるものであるのに、弾圧を受け文部科学省も認めず、公表されていない。日本の起源を探り記紀に隠された史実を明らかにするため、多角的な調査研究が期待される。

・岡崎洋一郎氏：高知の長宗我部顕彰会会长として参加しているが、長宗我部氏はもともと信濃秦氏の出身である。日高見国については、高知にも高見村、日高村という地名があるのは興味深い。日本人と渡来人との関係についての遺伝子研究など、科学的検証にも期待したい。

・富岡宏之氏：「岡山県通史」によると、備中國の中心は賀陽郡で、賀陽氏が栄えていた。賀陽氏は渡来系の氏族である。賀陽郡は秦氏という新羅からの渡来人の製鉄技術集団などに支えられ発展した。吉備には秦氏と関係する地名があるが、地名以外に秦氏を裏付ける直接的な証拠は少ない。秦氏の統率者ともいわれる御友別の子の仲彦が上道県に封じられ、上道臣、賀夜臣の祖となった。始皇帝の後裔の弓月君の渡来は、応神朝に九州に来て、日本海側から丹波、京都に、瀬戸内海側から吉備に渡來したといえる。

・板野忠司氏：総社市秦は、和名抄の秦原郷という地名を受けており、秦原廃寺という飛鳥時代の中四国で最も古い寺の跡があり、八弁单葉の軒丸瓦が京都の広隆寺の瓦に酷似している。それ以外に秦氏との関係を裏付ける直接的な証拠はない。間接的な証拠として、新羅の製鉄の女神を祀る姫社神社や、京都の秦氏の桂川の堰と同様の土木技術の湛井十二箇郷用水堰等、技術集団の秦氏との関係を伺わせるものは多数ある。秦地域にある3世紀末～4世紀の古墳は、秦氏の渡来は5世紀との定説から秦氏とは関係ないとてきたが、5世紀渡来という通説も見直されるべき時が来るを考えている。

【質疑応答、その他】

岡山歴史研究会の楠敏明会長から、討論が広範囲過ぎるので、①秦の始皇帝と秦氏との関係、②応神朝の弓月君の渡来、③秦河勝の活躍の3つの時期に

整理して議論したらどうかとの提案があった。その他にも活発な質疑応答があった。

4 古代吉備の史跡現地見学会(4月27日(日))

岡山歴史研究会の楠会長の作成した視察計画に従い、高知県からの参加者等約20名が自家用車に分乗して、地元会員有志による案内で史跡見学した。見学先は、楯築遺跡、造山古墳・千足古墳、鬼ノ城、こうもり塚古墳であった。天気にも恵まれ、参加

者はそれぞれの現地視察先で活発に質問するなど、古代吉備の史跡や渡来人秦氏との関係などについて学び、無事視察を終えた。



楯築遺跡にて

(板野忠司)

歴研サロンが開催されました

令和7年2月9日

「茅原基治船長ロシア小児難民輸送大航海」

元金光図書館館長 金光英子 氏

金光図書館の館長を務められた金光英子氏が表記演題により講演し、26名が熱心に聴講した。講演の概要は以下の通りである。



茅原基治の大航海と金光図書館

金光図書館には、茅原基治という人の書いた『赤色革命余話 露西亞小兒團輸送記』という本（冊子）がある。基治は、大正9年（1920）に陽明丸の船長として、ロシアのウラジオストック港からロシアの子供たちを乗せ、太平洋、大西洋を横断してフィンランドのコイビスト港まで送り届ける大事業を成し遂げた人である。



図書館長の時にこの本を借りに来た人があり、自分は初めてこの本の存在を知った。この記録があったから、大航海の全貌がよくわかるのである。ロシア語訳も出たが、まず原本（文語文）を口語訳して、それをロシア語に訳したものである。英語訳も大航海のちょうど100年後、2020年に出版された。その後漫画版も出た。

大航海の再発見

この大航海はその後忘れられていたが、救出された子供の孫にあたるロシア人英語教師のオルガ・モルキナさんが、2枚の写真（茅原船長と陽明丸）を元に、茅原船長の消息を探していた。救出された子供の中のオルガという少女とユーリという少年が船中で恋をして、祖国に戻つた後に結婚し、娘（モルキナさんの母）が生まれた。第二次世界大戦の戦渦の中で2人は離れ離れになり、別々の家庭を持つようになった。しかし、両家の関係は続いて、オルガとユーリは同じ墓に眠っているという。



茅原基治

北室南苑（石川県能美市在住の女性篆刻家・書家）という人がロシア絵本に興味を持ち、ロシアを訪れていた時に、たまたまモルキナさんから茅原船長の子孫を探していることを聞き、帰国後に2年間調査して茅原船長が笠岡市甲駒の生まれであることを突き止めた。そして、北室さんから平成23年（2011）6月7日に、「金光図書館に『露西亞小兒團輸送記』という本があると思うが、借りることはできるか」という電話がかかってきたのである。金光図書館の本は、一部インターネット検索ができるようになっており、北室さんはネットでこの本を見つけたとのことで、改めてネットの威力を感じた。

佐藤校長との出会い、そして就職

茅原基治は、明治18年（1885）6月に小田郡甲賀村の庄屋をしていた茅原家の次男として生まれ、北川尋常小学校から矢掛の小学校に行き、明治32年に金光中学校に入学した。当時の校長は佐藤範雄であったが、生徒の才能や性格を生かすことを重視していた。茅原基治は、「世の役に立つ人になって人を助けよ」と言われたことを心に持つて、神戸の勝田汽船に就職した。勝田汽船の社長は勝田銀次郎であったが、後に第6代神戸市長も務めた人物である。

基治はボイラーマンから始めて奮闘努力し、船長試験に合格した。しばらくは自分に合った仕事がなかつたが、その後外国航路の大型貨物船の船長になった。

ロシア革命からの避難と支援

1917年にロシア革命が起き、ペトログラード（現サンクト・ペテルブルク）では治安の悪化と食糧難が生じた。そこで、上流階級の家庭では、子供たちを夏休みの間ウラル地方で過ごさせることにした。しかし、革命の戦渦はウラルにまで及び、子供たちは難民のようになってしまった。そのときに米国赤十字社は、ルドルフ・トイスター博士（東京の聖路加病院の創設者）とライリー・アレンを中心に、子供たちを救出してシベリア鉄道で運びウラジオストックに保護した。

しかし、戦況悪化によりウラジオストックでの保護が難しくなってきたので、トイスター博士らは船で救出することを決め、アメリカを始め各国に救援を依頼したが、ことごとく断られてしまった。その中で、この人道的支援に応じたのが勝田汽船の勝田社長であり、実際の業務を受けたのが茅原基治であった。

ウラジオストックから室蘭へ

勝田社長は、大正8年（1919）に竣工した貨物船の陽明丸を翌大正9年6月に客船に改造し、ウラジオストックへ向かわせた。ロシアの子供779名とロシア人女性87人、そのほか計960名を収容し、日本人乗組員60余名とともに大正9年（1920）7月13日にウラジオストックを出航した。この時、茅原基治は35歳であった。同日中に陽明丸は室蘭港に入ったが、ロシアは敵国であるとして上陸が許可されなかつた。基治は、この子供たちはロシア革命により避難してきた上流階級の子供たちである旨を関係当局に説明して上陸許可を得て、15日に子供たちを室蘭の小学校で日本人児童と交流させた。翌16日に室蘭を出発し、サンフランシスコを目指した。

太平洋横断

航海に際してはインド洋を通らずに太平洋航路を採用したが、7月から9月の暑い時期であり、栄養・健康状態等に不安のある子供たちにとっては、インド洋経由は厳しいものになると判断したからである。船の中では、救命胴衣の着用訓練や救命用ボートの訓練なども行い、船上で運動会などもしていたようである。サンフランシスコには8月1日に着いたが、子供たちは、室蘭とは違ってアメリカは大きくてすばらしいと驚いた。5日までの滞在期間中、子供たちは歓迎会や市内の見物、また日本庭園の見学などで楽しい日々を過ごしたようである。

基治は、サンフランシスコからも佐藤範雄にこれまでの経過を記した手紙を書いているが、理系の人とは思えないような、中国の故事なども交えた文語体のすばらしい文章である。佐藤校長は、自分のところに来た手紙を差出人の五十音順に区分けして保存しており、基治の手紙も残っていたため、このようなことが分かるのである。



陽明丸の航路

パナマ運河からニューヨークへ

8月5日にサンフランシスコを出発したが、当時の冷房のない船で南に下るのは、子供たちにとっては大

変なことであった。子供たちは最初大はしゃぎしていたが、メキシコ沖を過ぎた頃からだんだんぐったりしてきた。このような状態でパナマ運河に辿り着いた。パナマ運河は、南側（太平洋）から北（カリブ海・大西洋）に通じている。^{こうもん}閘門（水位を調節するための水門）を3箇所通過するのだが、通過する時に篤志家が果物を船に投げ入れてくれたという。8月18～19日にパナマ運河を通過。カリブ海に出た時には波が荒く、子供たちが初めて船酔いをした。

8月28日にニューヨークに到着、9月14日まで滞在した。ハドソン川の船遊び、夜会や市中観光など、一行は連日歓待された。子供たちが菓子をたくさんもらい、日本人乗組員もおこぼれに与った。義援金も多数受けた。

当初ニューヨークからフランスに行く予定であったが、ここで行き先がバルト海に変更された。当時のバルト海は、第1次世界大戦の後で機雷が多数あるなど危険な海域であったが、子供たちからフランスではなく故郷に帰りたいとの要望があったためである。ニューヨークでは、病気や銃の誤射などで3人の子供が亡くなっている。

無事ヨーロッパへ

そして、9月14日にニューヨークを出港、フランスのブレスト港に9月27～28日に寄港した。ここで6名の子供が家族に引き取られて下船した。そしてドーバー海峡を通過し、ドイツのキール運河を通る時には、解体廃船された敗戦国ドイツの軍艦や、フランスやイギリスが監視しているのを目の当たりにして、敗戦国の悲しみを感じ、積んでいた食料品などを通過地のドイツ人に与えた。基治は、先行きの不安を抱える中で、なぜこのような人道的なことができたのか。それは、恩師の佐藤範雄が赤十字運動に携わっており、その影響があったと思われる。

危険なバルト海を通過する時には、水先案内人を雇って2倍以上の時間をかけて注意深く航行した。10月6日にフィンランドのヘルシンキに、10月10日にコイビスト港に到着。3箇月間寝食を共にした子供たちとも別れることになった。

コイビストからサンクト・ペテルブルクまでは200km程度であり、コイビストは現在ロシア領（プリモルスク）になっているが、1920年当時はフィンランド領であった。1939年の旧ソ連軍による侵攻により、フィンランドは国土の10分の1を奪われて、コイビストもロシア領になってしまった。日本の北方領土と同様の事象が生じていたわけであり、ロシアはそういう国なのかとつい思ってしまう。

その後の茅原基治

大事業が終了し、自分ならすぐに日本に帰るところだが、その後基治はデンマークのコペンハーゲンに立ち寄り、勝田汽船の社旗のみを掲げて元の貨物船に戻した。そして、1年以上にわたり貨物船として大西洋を行き来した後に日本に戻った。

帰国後は大阪に住み、戦争で負傷したり病気になった人を援助するなど、弱者の側に立った社会活動を実践した。昭和9年（1934）に、冒頭に述べた冊子『赤色革命余話 露西亞小兒團輸送記』を年賀状代わりに書いて、佐藤校長に送っている。

昭和15年（1940）、55歳の時に両親・祖父母の墓とともに生前墓を建立した。そして翌年に基治は佐藤に、「歳を重ねて56になったが、何一つ国家にも社会にも貢献できなかった」との趣旨の手紙を出している。これが基治の最後の言葉になろう。基治は昭和17年（1942）8月18日に亡くなったが、どのように亡くなつたかは不明であり、今後調べてみたい。

モルキナさんの墓参

平成23年（2011）10月には、来日したモルキナさんが基治の墓に参り、墓前で「陽明丸は、子供たちを救出し母国に戻してくれた、おとぎの国から来た船でした」という感謝の手紙を読んで捧げた。平成30年（2018）には、茅原基治を顕彰する会によって墓の側に顕彰碑ができた。

基治については、赤十字人道精神の強さに結び付けられた優しさ、人を大切にして自分を生かす、役に立

つことを求め続けた人生であったと思う。金光学園の合い言葉は、「人を大切に、自分を大切に、物を大切に」であるが、まさにそれを実践した人であった。

質疑応答

渡航の費用はどこが出したのかという質問があり、費用の大部分は赤十字社、特に米国赤十字社が出しているとのことであった。ボイラーマンから船長にまでなったのは、よほど優秀な人だったからだと思うがという質問に対しては、基治は大変優秀で、勝田汽船の時にドイツ留学もさせてもらい、ドイツ語にも英語にも堪能であったとの回答があった。

また、会報15号に北川まちづくり協議会による茅原船長の記事が掲載されているが（岡山歴研10周年記念誌に再掲）、まだ十分な資料が集まってなかった頃の記事であり、今回の講演内容の方が幅広いと思うと話された。
(井上知明)

令和7年3月4日

「戦後80年引揚者の実体験とその後の思い」

元岡山県職員 藤原静太郎 氏



参加者22人。講師の藤原静太郎氏は、昭和10年生まれ、満90歳。10歳の時、終戦を迎えて、朝鮮から引き揚げた。戦後80年を迎えた今、「戦争とは何だったのか」と自問し、10歳当時の鮮明な記憶を語られた。併せて講師の妻美也子さんも、当時はお互いを知らなかつたが、北朝鮮からの引揚者であった。講演の概略は、次のとおりである。

私は、終戦当時、朝鮮江原道春川邑に住み、自宅は道庁坂の2～3百m下で我が家は薬局を営み、薬剤師の父は応召し京城（現ソウル）の龍山陸軍病院に勤務していた。昭和20年8月15日敗戦とともに突然当局から日本人宅に回覧板が回り、全鮮からの引揚計画により順次帰国となるので荷物等の準備（荷物は背負うか手に持てるだけ）をするよう指示があった。母が、防空カーテンでリュックと子供が肩にかけるカバン（袋）を作った。9月末、出発となり、私は母と2人の弟（8歳と1歳）との4人で、自宅と家財道具などはすべて残したまま帰国の途についた。近所の人が豚饅頭を差し入れ、親切に見送ってくれた。敗戦で、引揚者によつては、地元の人たちから嫌がらせを受けたり、現地の朝鮮人ととの間に子供ができ、引揚できない人もいた。

引揚げは自宅を出て、京城まで汽車で2時間、京城駅構内でゴロ寝し、宿舎の女学校教室まで10キロ余りを歩いた。リュックが肩に食い込み、とても痛かった。教室に20日間ほど滞在の後、家畜輸送用の貨車に乗せられ、まる1日かかって朝鮮半島南端の釜山に着いた。食事の供給はなく、学校の教室で自炊し、10日ほど経過の後の10月下旬、国鉄の引揚者帰還船「興安丸」に乗船した。この船は7000トン、乗車定員1750人に7500人を乗せて夜出港した。直接接岸できる下関の港は機雷が投下されているため入港を避け、山口県の仙崎漁港の沖合に朝に停泊し、小さなハシケに乗り換えて上陸し、山陰・山陽線を乗り継ぎ、やつと岡山に着いた。

夜が明けてみると、岡山は空襲で全くの焼け野が原となっており大ショックを受けた。早朝出航の高松行きの巡航船で旭川を下り児島湾へ出て小串港で下船、祖父母の待つ宮浦の我が家に帰った。軍人の父は、傷病兵に付き添つて病院船で、1週間ほど前に帰っていた。帰るところがない引揚者も多数いる中、帰る「ふるさと」があることの喜びを実感した。我が家から1キロメートルの山中に、岡山空襲時のB29の墜落した残骸があった。十字架が建てられており、後日アメリカ兵の遺族が訪ねて来られ、敵の米兵を祀つていた地元の方に感謝したという後日談がある。

私の妻の美也子は、北朝鮮の羅南から歩いていくつもの山を越え、38度線を越えて、小さな漁船（闇船）で引き揚げた。妻の父は北朝鮮で建設会社に勤務、母が丹前に縫い付けた当時の5千円で闇船をチャーターし、それに友人たちも便乗して帰国し、とても感謝された。軍人を父を持つ自分と比べ、美也子の場合は、軍部

の引き上げの案内や支援はなく、厳しい逃避行の末、生死の境をさまよいながらやっと帰国した。戦争では、軍戦死者、玉碎・自決、原爆・空襲による死者等と併せ、捕虜、抑留、拉致、残留孤児、引揚など殺されなくとも過酷な体験がある。満州、サハリン等には、引揚さえできなかつた邦人も多数いる。

先の大戦で、日本は当時の領土面積の43%に相当する外地を失い、残留在外邦人の引揚者は約630万人、この人数は当時の日本の全人口7200万人の1割近くにも達している。藤原静太郎さんは、「戦後80年を迎えた現在、突然に裸一貫の引揚者となった悲劇も戦争の総括には不可欠であり、戦争は絶対に2度とあってはならない。」と結ばれた。
(板野忠司)

令和7年5月31日

「実現した市町村合併・消えた百万都市構想」

元岡山県合併推進室長 角田保彦 氏



参加者26名。明治から平成に至る岡山県下の市町村合併の歴史を振り返った。

①明治21年4月に制定され、翌年施行された市制町村制の実施に先立ち、明治の大合併と呼ばれる全国的に大規模な町村合併が、教育、徴税、土木、救済、戸籍の事務処理などの事務を行い得る地方自治団体をつくろうという構想の下に実施された。明治21年6月の内務大臣訓令で、およそ300戸から500戸を標準として強力に町村合併が推進された。本県においても、この訓令を受け、町村合併を実施し、それまでの1区68町1691村が1市3町451村と、65町1240村が減少し、およそ4分の1となった。なお、本県では、明治22年4月19日の県令第25号をもって、「明治22年6月1日ヨリ岡山区ニ市制其他ノ町村ニ町村制ヲ施行ス」とされた。

②昭和の大合併であるが、地方自治法施行当時、本県の市町村数は4市62町303村であった。しかし、このうち310町村が全国の1町村平均人口に達していないなど規模の小さな町村が多く、戦後の急激な行財政制度の改革による行政費の増高（新制中学校の設置、公共事業の実施など）にあえいでいた。昭和28年、町村合併促進法が定められ、県では、町村の規模としておおむね8千人を最低の標準とする町村合併計画を作成し、町村合併を促進した。さらに、昭和31年に制定された新町村建設促進法においても合併が進められ、結果として、昭和35年4月の市町村数は、12市70町16村となった。

③消えた百万都市構想であるが、昭和34年、当時の三木知事により岡山市と倉敷市を中心とする広域都市建設の構想が提言された。県では知事の提言を受け、昭和37年2月28日に、定例県議会へ県南広域都市建設計画について報告するとともに、昭和38年1月を目標とする同時大合併を推進する方針を表明した。新産業都市の指定に向けた手続きが進められるとともに、様々な協議を経て、33もの関係市町村すべての議会が同年12月26日までに合併議案を議決した。しかし、岡山市、倉敷市及び児島市からは県に合併申請書が提出されず、事態の收拾に乗り出した自治省案も実現しないまま、合併期日の昭和38年1月13日を迎える。岡山県南百万都市構想は消えてしまったのである。議会決定に首長が従わない事態が発生した。

④最後に、平成の大合併についてであるが、地方分権の推進や本格的な少子・高齢化社会を迎える中、極めて厳しい財政状況の中での効率的な行財政運営を求められることなどの背景から、市町村合併を進めることが必要であるとして、平成11年以後、国、県ともに自主的・主体的な市町村合併を推進した。こうした中で、それぞれの地域で合併に向けた18の真摯な取り組みが行われ、平成19年1月末までに県内市町村は、平成の大合併以前の10市56町12村（78市町村）から15市10町2村（27市町村）へと再編された。各地域の取り組みでは、住民投票やリコールなど話題になった事項を紹介した。

以上のように、市町村合併は、広域交通網整備や情報化進展、行政の高度化に対応すべく、それぞれの時代に応じて実施してきた。市町村合併を促進する特別法令や財政支援措置の期限がある中で、合併の相手方選択をはじめ、首長、議会、地域住民のそれぞれの立場で利害や方針が異なるケースもあり、合併に至るまでには様々な困難があったものと思うが、最終的には住民の意思が尊重されたものと思う。

（本稿は、講演内容を演者がまとめたものです。）

春の探訪会「秦氏ゆかりの地 播州・赤穂」報告

事業委員長・会員 古川 智

はじめに

渡来人である秦氏の族長的な秦河勝が開拓した播州・赤穂の千種川流域には、秦氏を祭神とする大避神社が30社以上ある。4月6日(日)に、この点在する神社や史跡を赤穂市「秦氏を学ぶ会」の野村副会長の案内で探訪した。

新年度早々の日曜日で花見シーズンと重なり、参加者13名と少人数となった。午前8時に岡山駅西口から会員の車3台で出発し、午前中は千種川上流の上郡町と赤穂市有年檜原・中山・木津地区を、午後は赤穂市坂越地区を訪問したので、その内容を報告する。

1. 上郡町大避神社（竹万）

赤穂市役所で野村副会長の車と合流し、途中赤穂市木津大工村の太子堂を見学した後、上郡町大避神社（竹万）まで車4台で移動した。この神社は、上郡町にある秦河勝を祭神とする大避神社でも最大規模であるとの説明を受けた。



上郡町大避神社（竹万）

2. 赤穂市立有年考古館

赤穂市へ戻り、旧赤穂郡を中心に収集した考古資料、民俗資料を多く収蔵する有年考古館を見学した。地元の遺跡から秦の文字が刻まれた須恵器が出土し展示していることが紹介され、参加者から感激の声が上がった。この考古館では、過去に「播磨の秦氏」の特別展を開催したことである。



秦の文字がある土器

3. 赤穂市大避神社（中山）と大避神社（木津）

千種川を下り、中山と木津地区の大避神社を見学した。中山地区にある神社の棟瓦には、秦氏の家紋である矢車紋が使われているとのことである。



秦氏の家紋である矢車紋

4. 赤穂市坂越での昼食

坂越地区へ入り、河勝のお墓が設置されている生島を対岸に臨む創作料理店で昼食をとった。この場には、赤穂市「秦氏を学ぶ会」の西田会長にも参加いただき、午後の行程である坂越の大避神社と奥藤酒造の説明を受けた。



西田会長の説明

5. 赤穂市大避神社（坂越）

昼食後、河勝が坂越にたどり着き、数々の功績を残し、地元の人々がその靈を祀った大避神社まで移動した。拝殿において生浪島堯宮司の神社にまつわる話を詳細に伺った。印象に残ったのが、ユダヤ由来の12の数字と、梅原猛の記念碑にある「ひょんの実に似たるうつぼで流れ着き」の話であった。最後に参加者全員で記念撮影となった。



大避神社（坂越）での記念写真

6. 奥藤酒造

河勝が坂越にたどり着いた際に、地元で迎えた12人の内の一人の子孫が経営する奥藤酒造の蔵元へ移動した。奥藤酒造は、江戸時代には赤穂藩の御用酒屋もつとめた歴史のある酒蔵で、敷地内の奥藤酒造郷土館では、海運で産をなした港町坂越の古い資料を展示していた。

おわりに

午後3時には坂越で解散となった。天候にも恵まれ、赤穂市「秦氏を学ぶ会」には企画作成からお世話になり、秦氏にまつわる興味深い話を地元の方から説明いただき、感謝を申し上げたい。

岡山歴史研究会

会長・事務局長 楠 敏明

岡山歴史研究会

副会長 大河原 喬

岡山歴史研究会

副会長・会計 中山 幸子

岡山歴史研究会

事務局次長 濱手 英之

岡山歴史研究会

事業委員長 古川 智

秦歴史遺産保存協議会

入会歓迎・年会費千円（現会員数 325 名）

和名抄『秦原郷』60基を超える古墳群と出合う
3～4世紀の古墳群＝茶臼嶽・一丁堀・大堀古墳
古代寺社＝秦原廃寺・麻佐岐神社・石畠神社・姫社神社
古事記・日本書紀・新撰姓氏録の「秦氏・・・？」

会長 板野 忠司

岡山歴史研究会

運営委員 富久 豊

岡山歴史研究会

会報編集長 井上 知明

秋の探訪会 「塩飽大工による備中の代表的建造物」

秋の探訪会を以下の要領で開催します。

塩飽諸島の中心地、本島で継続されてきた塩飽大工は、江戸から明治時代にかけて讃岐、備前・備中を中心に数多くの建造物を手掛けた大工集団です。令和3年3月の歴研ウォーキングでは、塩飽水軍・大工の本拠地である塩飽諸島の中心の島、本島を探訪しました。今回は、塩飽大工の代表的建造物である神社仏閣を訪れ、これらをつくった宮大工についての説明を受ける企画です。

塩飽大工の建造物数は、香川県より岡山県の方が多く、中でも備中の代表的な建造物として、吉備津神社、備中国分寺五重塔、宝福寺等があります。

塩飽大工顕彰会代表の三宅邦夫氏の案内で、これら神社仏閣を訪ねます。特に紅葉の名所である宝福寺では、雪舟の水墨画、また雪舟に関係した宝福寺の什物を展示した方丈が公開されます。多数のご参加をお待ちしています。

1. 日 時：令和7年11月14日（金）9:00～15:00 小雨決行
2. 集合場所：吉備津神社 駐車場 9:00 集合
3. 移動手段：参加者の車
4. 参加費：1,500円
(案内役謝礼500円、方丈入場料500円、御供料450円、レク保険代50円)
5. 昼 食：吉備路もてなしの館 弁当持参、食堂あり
6. 参加募集数：約25名（先着順）
7. 案 内：三宅邦夫氏（塩飽大工顕彰会）
8. 主なコースと探訪予定地
 - 9:00 吉備津神社 駐車場集合
 - 9:00～10:00 吉備津神社
 - 10:30～11:30 備中国分寺五重塔
 - 11:30～12:30 昼食 吉備路もてなしの館
 - 13:00～14:50 宝福寺（小鍛冶一圭住職からの説明あり）
 - 15:00 解散
9. 申込及び問合せ先 古川智（事業委員長）
参加ご希望の方は、電話またはメールで氏名、住所、電話番号をご連絡ください。（キャンセルの場合は、11月4日（月）までにご連絡ください。）
電話 080-1931-7463 <SMS（ショートメール）も可>
メールアドレス s.furukawa@seibuct.jp
 - 氏 名
 - 住 所 〒
 - 電話番号

以上

岡山歴研サロン 今後の予定

岡山歴研では原則として月1回、会員や外部から講師を招いて、研究発表・交流の場としてのサロンを開催しています。令和7年9月～12月までの予定は以下の通りですので、多数の御出席をお願いします。会員以外の受講も歓迎します。（講師の都合等、やむをえない事情により、変更することがあります。）

開催場所：ゆうあいセンター（きらめきプラザ2階、岡山市北区南方）

開催時間：13時30分～16時

受講料：1回あたり500円（当日徴収）

9月7日（日）「日本語は消滅してしまうのか」

講師：歴研おかやま編集長 井上知明氏

10月5日（日）「国家神の交代 タカミムスヒからアマテラスへ」

講師：古代史研究家 岡崎康民氏

11月1日（土）「豊臣秀吉の中国大返し説の真実・船利用・西大寺町誌説」

講師：岡山歴史研究会事務局次長 丸谷憲二氏

12月12日（金）「伊能忠敬 備前、備中、美作を測る」

講師：美作市歴史文化財研究会員 橋本惣司氏

編集後記

今号には令和7年度総会の報告、及び同日に開催された第1回秦氏サミット（岡山歴史研究会・秦歴史遺産保存協議会協賛）の報告を掲載した。

秦氏サミットは、秦・長宗我部氏の会全国連合会総会、基調講演、パネルディスカッション及び翌日の古代吉備の史跡現地見学会という盛り沢山の内容であった。秦氏やユダヤ人の渡来などを中心に、講演と幅広い議論があったが、仮説にとどまっている部分も多く、今後どのようにエビデンスを持って展開していくのかが課題であろう。

また、本年2月から5月までの歴研サロンの報告も掲載した。その中で、金光英子氏の「茅原基治船長ロシア小児難民輸送大航海」は、大正9年（1920）にウラジオストックからフィンランド・コイビストまでロシアの子供達を輸送した命がけの大航海の紹介である。講演を聞いて、このような偉業を成し遂げた茅原基治の徹底した人道主義の

精神は、赤十字運動に携わっていた金光中学校の佐藤校長の影響が大きかったことがよく理解できた。深い感銘を受けた2時間の講演であった。

藤原静太郎氏の「戦後80年引揚者の実体験とその後の思い」は、終戦後の朝鮮からの苦難に満ちた引揚げの体験を語られたものである。今年は戦後80年。今も世界のあちこちでは戦争が続いているが、あらためて、戦争だけは絶対にしてはいけない、今の時代を「新しい戦前」にしてはならないとの思いを強くした。
(井上知明)

発行 岡山歴史研究会
会長 楠 敏明
編集長 井上知明
事務局 〒701-0101 倉敷市日畑825 楠 敏明方
電話 090-7894-5519
メール aquatechnos@trad.ocn.ne.jp
ホームページ <http://b.okareki.net/>